

第95回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2017年5月8日(月) 14時～17時

兼題「薄暑」

川井素山 ○子を抱き上げ鰐口を搏つ薄暑かな
初夏や人それぞれの喫茶店
代掻くや流るる雲の影速し
船溜り満ちて夜舟や夏の月

保井寶正 ○水玉のブラウスにほふ薄暑かな
菖蒲湯の幽かな香り湯気となり
百余り子等の万寿の鯉幟
音もなく桜薬降る京の道

後藤克彦 ○塗装剥げ駅舎目立つや薄暑光
風に乗り大車輪する毛虫かな
五月晴れ女系家族も兜出す
水張りの田圃に蛙平泳ぎ

佐久間喬 ○木洩れ日に色を違へて椿落つ
大川の流れねばれる薄暑かな
一人酒音なき雨の春の宵
結納を終へ歩む道風光る

丸山酔宵子 ○石垣を越へて色益す芝ざくら
越後路や桜蕊降るフェアウェイ
つらさ聞く友の病や冷奴
銀ブラや赤い水玉昼薄暑

菊地崇之 ○春麗磯の煌き雑魚と子等
長閑や縁で御時儀か老夫婦
薄衣透かし見たきは胸の内
藍微塵想い膨らむ夜もすがら

吉田啓悟 ○寒村の御ほとけ照らす柿若葉
かなたより空かげりくる杜若
くちなし ちやせん
梔子や茶筌にふれし白き指
いきなりの薄暑に床屋いきそびれ

青木英林 ○眠さうな白いぼうたん風に揺れ
マーラーの大地の如き茶摘みかな
思はずも 目眩 覚えし薄暑かな
菖蒲湯にご近所揃ひ長談義

佐久間たか子○墨画展終えて眼に入る薄暑光
薫風や小庭にひびく祝お声
新茶呑む無言のままに笑みこぼる
夕暮に空にとけ出す桐の花

山本草風 ○歳嵩ねひこばえの如余生かな
また今年桜を愛でて歳ひとつ
白子干さざなみ立てて米の海
出る前にハンカチ探す薄暑かな

佐伯兵庫 ○初浴衣香が追いかけて下駄の音
風呂上り妻の呼ぶ声夏料理
庭いじり下着取り替え夕薄暮
里帰り孫がさしだすビール飲む

渡辺鯨波 ○追撃の思案あれこれ街薄暑
コロッケを店先で食う昭和の日
拓郎の軽妙トーク春の宵
ゆたかなる土偶の乳房花疲れ

澁谷瑠璃 ○触れられぬビー玉恋シラムネ瓶
亡き祖母のエナメルの爪さくら貝
パラソルをくるくるまわし溶ける柄
薄暑なるシーブリーズの香る街

石川智子 ○木綿着の心地良さ知る薄暑かな
青嵐なにを支えに進む道
こいのぼり風雨に耐えて泳ぐかな
エクセルの命吸い込む五月闇

次回「萩句会」

日時 2017年6月12日(月)14時～17時

場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『羽抜鳥』一句 当季雑詠三句 計四句